

【取扱い厳重注意】

平成23年10月21日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 三田 浩平

平成23年10月21日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

原子力安全・保安院 根井寿規審議官（原子力安全・核燃料サイクル・産業保安担当）

2 聴取日時

平成23年10月21日午前9時01分から同日午前11時45分まで

3 聴取場所

東京都千代田区霞が関1丁目3番1号 経済産業省別館5階501面談室4

4 聴取者

飯崎補佐、三田主査

5 ICレコーダーによる録音の有無等

 あり なし（理由：（「対象者の希望による。」など簡潔に記載））

第2 聴取内容

保安院プレス発表及び国際協力について
別紙のとおり

第3 特記事項

特になし。

【取扱い厳重注意】

別紙

1 被聴取者の経歴

私、根井寿規は、平成 17 年検査課長、平成 20 年経済産業局長、平成 21 年保安院審議官（原子力安全・核燃料サイクル）を担当し、平成 23 年に産業保安担当を追加されている。

2 発災日以後の役割

発災当日、私は、保安院の核燃料サイクル担当者や事故故障対策室長等と核燃料施設におけるトラブル処理について打ち合わせをしているところ地震が起き、直後に緊急時対応センター（以下「ERC」という。）に参集した。

ERC においては、私は保安院審議官として、ERC 総括班付近の幹部席に座り、ERC 全体のオペレーションについて把握・管理をし、また、寺坂元院長や平岡次長が官邸へ行き席を外している場合には、私のところへ上がってくる案件について、保安院のトップとして判断を下していた。

寺坂院長は事故直後から官邸に行き、平岡次長も海江田大臣と共に官邸に行ったため、3月11日の夕方頃は私が保安院のトップとなっていた。

3月12日17時頃、私は寺坂元院長から指示を受け、官邸へ行き、同日18時頃から総理応接室において総理にレクを行った。私が官邸に着いた頃には、官邸の中では既に1号機の爆発は水素爆発であったとの共通認識になっていたが、私は17時頃 ERC を出発する頃には、ERC 内においても格納容器から水素が漏えいして引火、爆発が起きた可能性が高いとの共有認識であったため、特段不思議には思わなかった。

当該レクの内容については、1号機建屋水素爆発後、1号機を冷却するための海水注入実施について議論になっていた。そのレクには海江田大臣、松下副大臣、田嶋経産大臣政務官、班目委員長、久木田委員、武黒フェロー、 東電部長、平岡保安院次長がいた。このレクにおいては、1号機建屋水素爆発後の海水注入に際し、再臨界や再度水素爆発を起こす危険性の有無が論点であり、久木田委員が「再臨界を起こす可能性は低い。」旨の説明をしたところ、総理は「ゼロじゃないんだろう。君はまた嘘をつくのか。」と激昂していた。

レクが中断した後、20時過ぎにレク再開後総理からようやく了解を得られたため、確か、22時頃に ERC に戻った。ERC に戻ったら、ちょうど野口審査官がプレス発表をおこなっている最中（同日21時30分（第16回）のプレス発表）であるところが TV で放映されていた。

その後、私はしばらく ERC 内の自席において執務を行っていたが、3月13日午前4時頃に、寺坂元院長の指示に基づき官邸へ行った。

官邸においては、総理応接室において、海江田大臣や細野補佐官等に対して、1号機への海水注入についてレクをした。この時、海江田大臣から東京電力だけに任せるのではなく、安全規制省庁として保安院も現場で海水注入の様子を確認するようとの指示があり、私はそのことを次の保安院プレス発表において私から発表する旨海江田大臣等に伝えた。他に、その場にいた海江田大臣や細野補佐官等から保安院プレス発表が官邸

【取扱い厳重注意】

の意識と齟齬があつてはいけないといった旨の話があつた。

当該レク終了直後、私は、電話で加賀企画調整課補佐に、1号機海水注入の状況を確認するため保安検査官を現地に派遣するようにとの海江田大臣からの指示を伝えた。(

)
その後、直ぐに ERC に戻り、13 日午前 5 時 30 分からのプレス発表を実施した。同日午前 10 時に記者会見を行った後、私は、ERC の自席に戻りしばらく執務を行っていたところ、河相副長官補から電話があり、同日 19 時に米国の専門家が来るので会って欲しい旨の話を受けたので、私は、米国の専門家と会うよう、野口首席統括安全審査官と坂内国際室長に対して指示した。

その後、自室で仮眠をとった後、3月14日14時から経済産業省において、西山審議官と NRC の専門家と会い、主に私たちから現在のプラントの状況について説明した。

その後、寺坂元院長の指示で官邸に行き、2号機の冷却に係る話を総理執務室でした。その場には、菅総理、海江田大臣、細野補佐官、寺田補佐官、班目委員長、久木田委員、安井部長、武黒フェロー、東芝 氏がいて、他に枝野官房長官と福山副官房長官が出入りしていた。その議論が終了後、私は、官邸の2階に行き、久木田代理と一緒に15日午前4時頃まで仮眠をとった。

15日午前4時頃に、その時官邸5階に来ていた寺坂元院長が2階に下りて来て、私は寺坂元院長から起こされ、寺坂元院長からこれから総理が東京電力へ行くので、先に我々も東京電力へ行く旨言われた。

私は、午前5時頃に寺坂元院長と車で東京電力本店へ着いたが、東京電力本店には他に、海江田大臣や細野補佐官も来ていて、菅総理の到着を待っていた。

菅総理は5時15分に東京電力本店に到着し、2階の緊急対策室(以下「緊対室」という。)において、東京電力勝俣会長、清水社長以下、その場にいる社員に対し、政府・東京電力統合対策本部(以下「統合対策本部」という。)を設置し、今後の事故に対処していく旨の話をした。

そして、具体的な方針について少人数で打ち合わせをするという、緊対室の向かいの小部屋に行った。その部屋には、海江田大臣、細野補佐官、安井部長、勝俣会長、清水社長、武藤副社長などが入って行った。菅総理等が打ち合わせをしている最中、私は、寺坂元院長とともに、今後保安院から統合対策本部に人を出さなければならなくなるため、各フロアの状況をチェックしていたが、いつまでたっても打ち合わせが終わらないので、長居していても仕方がないと思い、寺坂元院長とともに、車で ERC に戻った。ERC に戻った時に、TV で4号機建屋の火災や2号機爆発に関するニュースが流れていたと思う。

16日か17日に貞森総理秘書官から電話があり、保安院がプレス発表を行う際には、事前に内容を官邸とすり合わせるようと言われ、18日か19日頃まで、ERCにおける私の業務のほとんどはプレス発表についての官邸との調整に時間を割かれていたが、18日か19日頃によりやくルーティン化してきたため、それほど調整に時間がかからなく

【取扱い厳重注意】

なってきた。

また、私は 18 日に市ヶ谷の防衛省に行き、原子力関係の会議に出席し、米国へプラント状況の説明をした。

20 日以後は、米国との協議関係にかかりきりになった。

3 保安院プレス発表

保安院プレス発表については、中村審議官から事前に了解を求められたことはなく、中村審議官が寺坂元院長に報告していた内容を把握していた訳でもなかったが、プレス発表においては把握している事実をそのまま出すだけなので、そういう意味では中村審議官と共有されていない情報はないと認識している。

もともと、保安院におけるプレスクリアはなく、時間がなければ院長にもクリアを取らないのが普通であるくらいなので、いちいち官邸に連絡などしない。把握された事実をそのまま発表するだけなので、把握された事実がきちんと共有されていれば問題ないはずである。

中村審議官が、12 日 13 時頃の保安院プレス発表において福島原発の現状はシビアな状況である旨の発言をしたのは認識していた。その時は、ベントができたとの報告を受けておらず、圧が下がらないと原子炉に水は入らないので、満身に注水がされている状況とは認識しておらず、燃料頂部より水位が下だと ERC 内でも正直しんどい状況であることは共通認識であった。

(被聴取者に対し、3 月 12 日にセシウムが検出された件を放医研から報告されたかという旨の質問をしたところ、) 12 日午前に核種分析でセシウムが検出されている旨は聞いていたが、確か、6 月 3 日に公表された、現地対策本部のモニタリング結果の生データをその時見たのだと思う。放医研というのは、私が思うに、現地対策本部には放医研の者が数名おり、そのうち誰かが、分析結果について ERC に報告したのだと思う。私は、セシウムが検出されたことについての解釈を前川防災課長に質問したところ、燃料が溶けていると考えざるを得ないとの回答を得たし、炉心溶融している可能性が高いという認識は私自身も持っていた。3 月 12 日 14 時頃のプレス発表に私も同席したのは、セシウムが検出されたからである。それまでのプレス発表には私は同席していない。

3 月 12 日 14 時頃の記者会見においては、中村審議官が自ら積極的に炉心溶融と発言したのではなく、記者の質問に対して炉心溶融していると答えたので、私はその時、「これは言わされてしまったな、間違いなく記事になる。」と思った。

その会見後、しばらくして、私は、寺坂元院長から呼ばれて、「官邸から中村審議官を記者会見から外すよう言われたので、申し訳ないがその旨根井君から言ってくれないか。」と言われた。中村審議官は、ちょうどその時ベント成功に関する臨時プレス発表をしていたので、終わったら私のところに来るように中村審議官に伝えた。本来ならば、広報官の交代については院長自ら本人に告げるべき話であるが、その時確か、寺坂元院長は官邸に行かなければならないか何かで時間がなかったため、私に指示したのだと思う。官邸とは誰かはわからないが、私は、中村審議官の炉心溶融発言について早速報道で取り上げられているようであったし、そのことを政治家達も気にするだろうと思っていたので、寺坂元院長に官邸の誰かは聞かなかった。

【取扱い厳重注意】

また、その時、私は、広報官を他の誰に交代させるかということのを寺坂元院長から聞いてはいなかったが、寺坂元院長は誰かに広報官をするよう指示していると思ったので、誰に交代させるかも聞いていなかったため、何故その後野口首席統括安全審査官が広報官になったのか分からない。

その後、私の下に来た中村審議官に対して、彼を傷つけるといけないので、「君は間違ったことを言っている訳ではないけど、その結果報道されたことに懸念を示す人達がいて、別の人を広報官に立てると寺坂元院長から指示があった。」といった旨を伝えた。私は中村審議官には官邸という言葉をあえて使わなかったとの記憶があるので、中村審議官が官邸から指示があったことは知らない可能性が高いと思う。その後、12日17時50分からもう一度中村審議官が広報官をやっているのであるが、その時私は官邸に行っていたため、何故、中村審議官がもう一度担当をしているのか理由は分からない。野口首席統括安全審査官が準備できてなかったのではないか。

3月12日21時45分と13日午前1時25分に野口首席統括安全審査官が広報官を担当したが、13日午前1時25分の会見後、私は、寺坂元院長から、野口首席統括安全審査官は記者からの評判が悪いため、私が広報官をやるよう指示を受けたため、私は、野口首席統括安全審査官に広報官を交代することとなった旨伝えた。

3月13日午前5時30分の保安院プレス発表は私が広報官として対応したが、当該プレスにおいて、中村審議官が炉心溶融の可能性が高いと発言したが今はその可能性がどのくらいあるのかという記者からの質問に対して、私は、「既にそういう物質がでてきているから、可能性として否定できない」旨の回答をしているが、それは、セシウムが検出されているので、炉心溶融の可能性は否定できないという意味である。

また、私は、3月13日午前5時30分の回も、同日午前10時5分の回も、成田経済産業省広報室長から、記者会見ではなく、記者振りであると聞いていたので、私は、「保安院プレス発表である」との認識はなく、記者に対する説明を行う場だと認識しており、会見場ではカメラはたくさんあったものの、まさか放映されているとは思っていなかった。しかし、実際には全国ネットで生中継で放映されており、私が「それでは資料のページを開けてください。」などの説明の仕方をしていたところ、午前10時5分のプレス最中に、松永次官と松下副大臣から「全国ネットで生中継されているところで何という説明をしているんだ」旨のメモがほぼ同時に2枚来た。チョンボだった。

その会見後、あまりにも国民に対するメッセージを出すという意識が足りないとのことで広報官の交代を指示された。私は、記者会見であることを知らなかった旨を松永次官に申し開きしたし、成田室長が松永次官に、私のプレス発表での受け答えが記者からの評判が悪くなかったため、私の広報官としての続投を申し出てくれたのだったが、松永次官からは、西山審議官に対して次の広報官を担当するよう指示をしているし、さすがに続投は厳しい旨言われた。

16日か17日に貞森総理秘書官から電話があり、保安院がプレス発表を行う際には、発表内容をすり合わせるようにと明確に言われた。12日午後辺りに、官邸側の誰かから保安院に対して、保安院プレス発表の事前に官邸側と調整を行うようにとの話があったことについては知らない。貞森総理秘書官から受けた話のトーンとしては、保安院でどんどん勝手に話をしていると官邸側ではとらえていた。私の感覚では、保安院プレス

【取扱い厳重注意】

発表文案を明確に官邸からクリアをとっていたのは 16 日前後辺りからである。もし、別のラインで調整をしているのであれば、総括班の片山企画調整課長か佐伯補佐である。プレス関係かどうかは分からないが、佐伯補佐は事故発生直後から、頻繁に長谷川海江田大臣秘書官と連絡を取っていた。

4 日米協議開始の経緯について

3月13日に米国側から、原子力関係の専門家を派遣したので受け入れて欲しい旨の話が入ったようで、その話を経済産業省通商政策局と河相副長官補が受けたようである。同日午前10時5分のプレス発表を終えたしばらく後に、河相副長官補から私のところに電話がきて、河相副長官補は私に対して、宮川外務省軍縮不拡散・科学部長とともにNRCの専門家を保安院に行かせるので、同日の19時から会って欲しい旨と、専門家がワシントンを出発する前に彼らと電話会談をして欲しい旨の話を受けた。本来、私は、国際担当ではないのだが、河相副長官補は、確か岡田経済産業審議官に私の名前を聞いて、電話をかけてきたようだった。しかし、私は当時プラントの状況も落ち着いていなかったため、プラント対処を優先することとし、野口首席統括安全審査官と坂内国際室長に対して、NRCの専門家と会うよう指示をした。後で報告を聞いたところ、NRCの専門家はまだ日本に到着しておらず、その会合の実際の米国側参加者はDOEの専門家であった。

3月14日、私は、佐々江外務省事務次官から依頼を受けた松永経済産業省事務次官から指示を受け、同日14時から経済産業省において、西山審議官と赤星米州課長、市川外務省経済局政策課長等とともに、NRCの専門家（キャスト氏ではない）と会い、主に私たちから現在のプラントの状況について説明した。私は国際担当ではないのだが、国際担当の中村審議官はIAEAの対応に追われていたため、結局この会議後も私が対応することになった。 [REDACTED]

3月16日辺りには、官邸にNRCが来て、確か今細野大臣秘書官付をやっているオザワ氏、結城補佐等が官邸に行き、NRCに対して情報提供をしていると思う。しかし、満足に英語をしゃべれるのはオザワ氏くらいだと思うし、NRCは通訳を連れて来ていたのではないか。

3月17日辺りに、冷却水源の確保が問題となっており、ポンプの問題で海水が十分に汲み上げることができなくなってしまったため、代替の大型ポンプを用意し、在日米軍にそれを運んでもらうことになったため、その調整のために、私は3月18日に東京電力を連れて防衛省に行った。しかし、どこでどのようにすれ違ってしまったのか、実際には、米国側へのプラント情報の提供がメインだった。私は、当初30分くらいで終わるだろうと思い出席したのに、この緊急時に携帯電話の繋がらない防衛省に2時間近く拘束された。

また、この頃、何故かNRCがプラント情報をとるために防衛省にコンタクトを取っ

【取扱い厳重注意】

ていたらしく、ところが、防衛省にはプラント情報がなかったので、防衛省が経済産業省に依頼したらしく、防衛省に行きプラント状況について説明して欲しい旨経済産業省官房総務課から私のところに依頼があったので、3月19日にもまた防衛省へ行った。

私が思うに、米国海軍は原子力船や原子力潜水艦を所有している関係で、米国海軍には原子力関係のエンジニアが多く、その関係で NRC にも海軍 OB が多くいて、
も海軍 OB だった。海軍はきっと日本も米国と同じような具合だと思い、防衛省には専門家が多くいるため情報量も豊富であると誤解し、NRC を防衛省に連れてきたのではないかと。他に、初期段階では米国からの物資調達メインであったため、軍同士でのやり取りも多かったことで、米国海軍がコンタクトを取りやすかったのだと思う。しかし、実際には、防衛省はプラント情報をほとんど持っていなかったため、結局 19 日に保安院を呼ぶことになったのだと思う。正直、プラントの状況は刻々と変わっており、私は、プラントへの対応を優先させたいのに、携帯電話の通じない市ヶ谷の防衛省に行きたくはなかった。

防衛省に行ってみると、長島議員がいた。長島議員は米国の外交評議会に属していたこともあるため、日米関係に大変詳しい方だ。この協議には米国側だけでなく、外務省も参加していた。この協議も、NRC へのプラント情報の提供がメインであった。

実は、この 3 月 19 日の NRC との協議が今後の日米協議のきっかけになったのだが、翌日の 21 日、私は、海江田大臣から呼ばれて、海江田大臣から、「そのような協議に参加するなら事前に僕に報告するべきだろう。何故君は協議に参加したんだ。」と問われたので、私は「協議に行きたくはありませんでしたが、官房総務課からの指示で仕方なく参加しました。」旨の話をしたが、海江田大臣から「何で経産省官房総務課が君に指示する権限があるのか。大体君は私の部下だろう。行きたくないならそう私に言えばいいだろう。」とお叱りを受けた。後で、誰かから聞いて私は知ったのだが、どうやら、20 日の協議の議事概要を外務省が作成して官邸に共有したため、菅総理がそれを見て防衛省が勝手にイニチアチブを取ってそのような協議をしていることを知り、菅総理は電話で北澤大臣に対して激怒し、海江田大臣に対しても保安院審議官がその会議に出席していることを認識しているのかと問うたため、海江田大臣も驚いて私を呼び出したようだった。私は、菅総理は、関係者が一丸となるために統合対策本部を設置したのに、また外で勝手にそのようなことをやっていることを知ってお怒りになられたのだろうが、それも無理はないなと思った。総理から叱られただけでなく、その後、私からも防衛省にいる同期の審議官に対して、防衛省には二度と行かない旨を申し入れたため、防衛省が主催で NRC や保安院、東京電力を集めて協議を行うことが出来なくなってしまったのだと私は思う。

その結果、21 日に防衛政策局長から細野補佐官、伊藤危機管理監、福山副官房長官にレクに行き、官邸中心に日米協議を行って欲しくないかということをお願いした。言わば、防衛省が官邸に泣きついた格好になっていた。そのレクには、私、寺坂元院長、官川外務省軍縮不拡散・科学部長、他に確か長島議員が陪席していたと思う。当該レクの結果、21 日の夕方に内閣官房安危室の主催で、旧いすゞビルにおいて、日米の関係省庁と東京電力を交えて、日米協議設置準備のための協議を行い、今後当該協議を毎日行うこととし、また、モニタリング、事故進展予測、長期的な事故対応の 3 つの WG を

【取扱い嚴重注意】

設置した。別途、夕方の会議前に、来日していた NRC 調査団の [REDACTED] 氏とメールでやり取りをして、日米協議の WG 的な位置付けで、保安院と NRC の日米規制当局同士で情報共有・意見交換を行い、その結果を日米協議において紹介することとし、夕方の日米協議設置準備の協議の場において、細野補佐官に了解を取った。

なお、おそらく官邸の中で問題になっていることを知った NRC から、21 日のレク前に私のところに連絡があり、「私たちは満足な情報を得るための調整をしてもらうには、やはり NISA (保安院) とコンタクトをとらなければならないことがようやく分かった。」旨の話をされたので、私も、20 日の会議を除いては、NRC とは 14 日に直接会っただけだったので、もっと早くから継続的にコンタクトを NRC から取ってくれればよかったのと思った。

なお、私は、国際関係の事務について寺坂元院長から指示を受けたことは一度もない。

5 日米協議の内容について

[REDACTED] それに関連し、淡水をバージ船に詰めて、福島第一原子力発電所（以下「1F」という。）に運ぶ計画に対して東京電力が難色を示している旨、Jヴィレッジの志間補佐から伝えられていたことについては承知していないが、私の感覚では、東京電力はこれだけの事故を起こしているにも関わらず、全て自前で何とかしようとしている印象を私は持っている。東京電力は、外からの援助はなるべくご遠慮願いたい旨の態度を示していたと私は記憶している。そのため、志間補佐からそのような情報があったというのは不思議ではないと思う。

淡水を積んだバージ船については、何かあった時のために 1F 付近で待機していた。結果としてバージ船の淡水を使わなかったが、私は、たまたま使わなかっただけで、あるだけで安心感を与えたはずだと思っている。

6 窒素封入について

確か、格納容器内の空気が水素 4%と酸素 5%くらいになると水素爆発を起こしてしまう可能性があるのだが、1F 1～3号機の格納容器が水素爆発を起こしていないことの一つの理由は、格納容器の中のほとんどは水蒸気で占めているからである。窒素を封入する際には液体窒素を封入することになるので、原子炉が冷えすぎてしまい、水蒸気も冷やされて水になってしまい、水素や酸素濃度が上がってしまい爆発の危険性が高まることは、元々わかっていた。

ただ、3月末の段階では原子炉の冷却が全然できていなかったが、4月10日頃の段階ではある程度冷却できていたため、いつの時点であるかで、窒素封入による水素爆発の危険性のイメージが全然違う。

冷却が出来ていない段階では、追加で水素が発生する可能性があるので、窒素封入も対応策のうちの一つとして持つておかなければならないことは関係者の間でも共通の認識だったと思う。

例えば、今は冷却がある程度されている状態なので、窒素封入を行ってもほとんど意

【取扱い厳重注意】

味がない。しかし、このような言い方をすると語弊があるかもしれないが、今プレス発表に参加している記者の大半は原子力については素人なので、窒素封入をやらないことについて説明しても、彼らは私たちにはぐらかされたと思い、メディアで煽られてしまう危険性があると私は思う。私の理解では、窒素を入れても状況を悪くすることは全くないため、安心感を与える上で、窒素封入を行っているのが今現在も窒素封入を行っているのが実態であると思う。